

竹の琴

森野 水琴

彼は十二月に奈良マラソンを走った。かつての都、平城京の南を走り緊張した。夏に要人が凶弾に倒れた現場に思いを寄せた。

奈良市から天理市へ走る途中で楽器を叩く音が聞こえた。竹が奏でられているようである。木琴ならぬ竹の琴である。心地よい響きが背中を押す。勇ましい太鼓とは別な温かみを感じられる。

折り返して再び竹の琴を聞いた。道を挟んで竹林に反響する。竹の琴に包まれているようで心地いい。

ふと考えた。彼は何になりたいのだろうか。

心地よく響く音になりたいのだろうか。

良い音を奏でる竹になりたいのだろうか。

良い音を奏でる者になりたいのか。

いや 良い言の葉を紡ぐ者になりたい

一年後の十二月、彼は奈良マラソンに帰ってきた。

竹林が近づき、竹の琴が心に沁みる。

奏者たちは彼よりも年上に見受けられた。

今回も往きと帰りの二回演奏を聞いた。

帰りには感謝の挨拶をして彼はゴールを目指した。

また来年も聞きに来よう